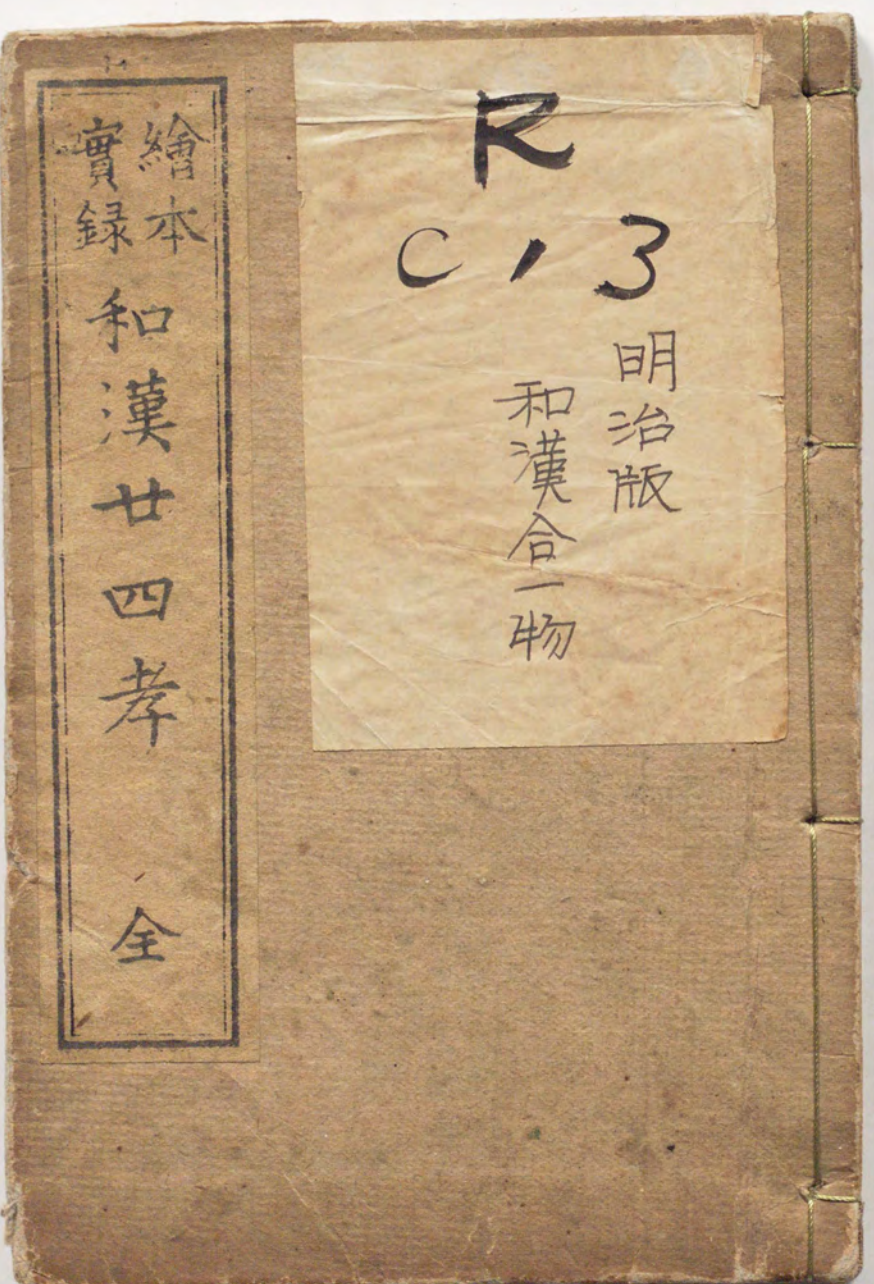


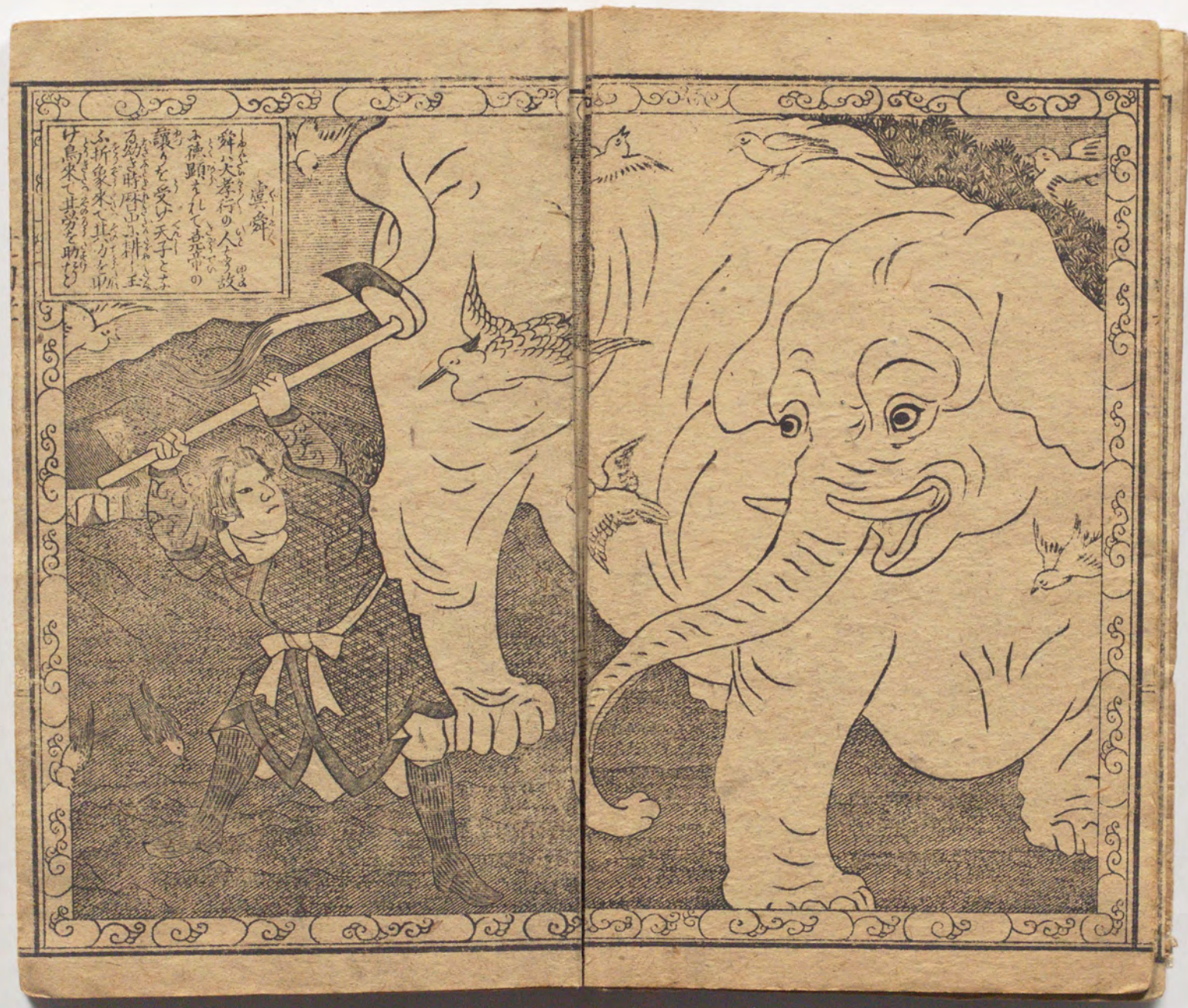


繪本和漢二十四孝全

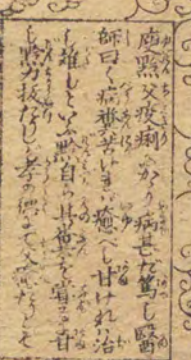
東京 金壽堂新版



此は孝子の
行状を
物語り
しるす



眞舜
舜ハ大孝行の人ナリ故
ニ徳ヲ有レテも帝ノ
譲ヲ受け天子トナ
ル時野山ニ耕シ玉
ル折象米其力ヲ助
ケ鳥來其勞ヲ助ケ



楊香魚の
國の人や或
時父と云ふ山
へ行けと云ふ
ある虎出て父

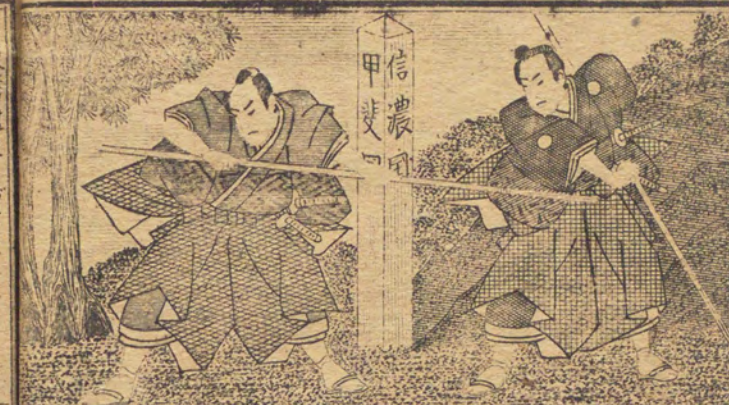


以哲^{いさ}子^こを^を母^{はは}に^に入^{いれ}て^て父^{ちち}に^に入^{いれ}て^て居^ゐる^る
 見^みえ^える^るに^に似^にて^て居^ゐる^るに^に似^にて^て居^ゐる^る
 温^ぬく^くに^に似^にて^て居^ゐる^るに^に似^にて^て居^ゐる^る



茲ふ横藏慈悲藏とて赤白二
 人の同胞なり氏も素性も正しき
 人の子とて母を載きて朝夕
 かへき居りしに兄横藏横道
 の見せかけて其内心は智
 恵深く軍学兵法の奥義を極
 めて百万の敵を破るの掌は在り
 しかば後世は甲斐の國の
 名將と其名も高き武田信玄公
 の大軍師と仰がれ山本勘助晴
 幸入道と號し智略諸國を奮
 ひて功なり弟慈悲藏はまじし
 く至つて母を孝をつく最ま
 めるを見されしにこれ軍略
 智謀を長し一騎當千の勇士
 ありされは越後の國は名も高





信濃
甲斐

郭巨為母欲
埋子而得
黃金

郭巨、後漢の人あり
家貧して老母を養ふ
其食の不足あらんとを哀む
老母、三歳はる孫を養ふ
其食を分ち與ふ故
郭巨夫婦之を憂へ
相談して遂に其子を
埋んとせり

感して黃金を得
郭巨は與へ
たり

直江山城守と名乗
りて越後と云ふ
方らぬ兩軍配
八年の戦ひ川中島
其の事を書つて愛ふ武田
家普代老臣跡部利部大膳
も主家を押領せんと欲し我子
義作を若君勝頼に入かへ首尾
せんものと思ひきりて我が家子
を失ふにぞれど逆意のり
され其身あへて討たれハ天
道誠を照しふ罰の程こそ
然るは天輩水々孝
のな捨ねいある中孔房
名を綴てを賜うたり



郭巨は與へ
たり



さし明記と拾見を拾ひ乳を抱へ
んと二人の大夫腕あけても我
方と言争ふて保科を言伏せ唐
綾とて立帰る此見の父を軍師
と頼んと門とふ声は慈悲蔵元よ
ういらぬ小見ゆる勝手次第ふめさ
もよく門口され唐綾は是非あく
稚子を置てかゝる斯くて上杉景
勝は我身かゝるは立かゝる進物
ものを持せし横蔵の家まきたる
老母を前ふ差出り此家よめる
横蔵と云ふ者を召抱へたき山を
申し何分とまよふ頼り入る老母
別きて立かゝる横蔵は引かゝる慈
蔵は何卒して筆を握得んと雪
かきのけて堀りて一個の箱は



孝行の人あり父母を思ふ念
常は絶ゆることと云へり



唐夫人の姑の
長孫夫
人事
へて孝なり姑
年老て齒ふも
故我乳を與
へて長年月を
過せける
姑大に喜ひ
て子孫を
集め云ひ
けるやう
唐夫人を

丁蘭

山本流の軍書の一巻横載いふ
かひより夫遺ていと争ふなり此処
へ母出で二人を争ひ止たりける
是より二人の同胞は田斐と越後へ
とをさける

手本
て行ひ
を立られ
よと実よ
孝と謂へし

像之刻

行水のそれと人の義作かまが
見かき長上下修々にしてと
間を立出で民間は育ちし故
人は面を知られぬこそ幸ひ花つ
よりとあつて入込幼君の御身の
上を余がふら守護する某
夫と悟りて抱へて合點行なぬ
と思案の体八重垣ひめ勝頼
ら討死せし忌日を吊ひ又濡衣
もとくは泣きふらふはるさ
りける斯くて義作は心付



丁蘭は年十五よりて父母を失ひし
ゆゑ木を以て像を刻し朝夕これを
拜し生ふ事ふ如しといふ



我ながら不覚のこころに
 立上る後ふふふふ濡衣に
 ななふふふふふふふふ伏流
 八言垣垣とて透間もる姿
 見まふ方ふふふふ勝頼
 様と飛立心ふふふ勝頼
 り付く装束おどろき振やら
 更ふ止まざるあけは
 性の御兜並んで欲し
 姫はまふ疑ひて其御
 をお望みある勝頼まふ
 ふいと言ふて今いせんか
 心をかせぬぬれぬぬへま
 せぬぬれぬぬれぬぬへま
 泣く濡衣心ふふふ



ト
 四
 五

黄庭堅
 親筆

王祥
 母生魚
 求鯉

孟宗
 泣竹
 生笋而得

慈母進



江華ハ後漢の人
あり世の乱に遇ひ
て母を伴ひ他國
へ移りける其
身ハ
赤裸素
足の人
雇され母を
養ふ
ける其後
乱治りて故郷へかへる

其折から父謙信を尋ねて義作
いづき居る塩尻への返り時刻
移ると出立をいはれ義作はあ
さり御支度よくいづき参上ホ
委細の事ハ此ふ箱は片時早
く罷らせはんと領事箱たつて
塩尻まで急ぎ行く謙信路を見
送つてヤアと者ハ用意よく
いづき参上ホと白須賀大
郎原小次治更科ふんの譜代の
郎等御前ふ進めハ謙信いさ
言するやう今此諏訪の湖水水
開きハ渡海ハかまそハ塩尻迄ハ
陸路の切所油いへて不覺を取
ふハア畏る奉つと勇進んで
かけり行く跡ハ不審ハ重垣ひめ



母を車に乗せ牛馬を引か
給ふ自らそれを引きて
歸りける遠江華
孝養朝廷ハ開ハ高
官ふ登り子孫
榮へて富を致
けるとぞ
為身在蜀
投水寄生魚
忽至前川瀬
豈非孝感歟



関損軍衣順母。関損ハ
孔子の弟子十哲の一人
関子雋の幼きより孝に深く實母
早く死してより父後妻を迎へ二人の子を

申し父上とて。今有るさあ
何事と問へ。誠信肯まをられ
を武田勝頼討手の人数と云われ
て姫。仰天。勝頼の助命を願へ
と聞入る。又濡衣。武田家の
廻りの憎き女と引立る。八重
垣姫も共々帳たい深く引入
たふさふさひて幾重もれくる瓜
音。君をみるの奥御殿八重垣
姫。打ふて歎き思案。何れ
り。わが。泣いて居られぬ所
追手の者。先へ廻り勝頼様よ
此事を知らせや。近道の誑
の湖船人。渡り頼まん急かん
小つぬ取手。か。以上頼
む。神。床。祭り。法性の



生む。母我子を愛して関損を要む
と雖も曾て恨まらば孝行と盡しける
父の時
大最り後
妻を逐出しけり
大よを諒めける母雋

後。心。感。し
後。心。感。し
後。心。感。し



王褒の護墓
 王褒の母の墓に畏る母死して後
 蔡順ハ後漢の人
 母ハ幼少して父を亡じ
 母事へて孝行あり
 蔡順ハ常ニ菜の賣を拾て
 母に奉ず或日市中で賊に逢ふ賊
 蔡順の孝に感シ食物を與へ
 た

神武天皇を支へ此御魂ハ諏訪明
 神武天皇へさづけられし室
 あれ取も直さく諏訪の御神かつ
 よう様の今の御難義助けたまへ
 救ひ王へと魂を取て押いたさき
 頭かつげハ忽ち姿狐火の爰ふ
 るハ被所ふも乱る安ハ法
 性の魂を守護するふきの何り
 さる此方の間ハ手弱女御前始終
 の様子窺ふ共さ白菊の花の番
 小屋ふつくと兵衛が付廻し
 神通力とさう響く鉄炮の音を相
 圖小遠近より俄に寄来る鐘太鼓

明治廿五年 月 日 印刷
 全 年 月 日 出版
 編輯部 發行所 牧金之助
 浅草區南元町十五番地



